

留学生受入・派遣による国際交流事業と異文化理解

小松 正明*

Evaluation for the International Exchange Program and Cross-cultural Understanding based on the Foreign Student Exchange Program in Kushiro College

Masaaki KOMATSU

Abstract —National Institute of Technology, Kushiro College has established the Academic International Exchange Agreement with Turku University of Applied Sciences on November 28, 2011 and with King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang on August 28, 2013. These two agreements are to establish and develop teaching and research links between each Institute. Based on these agreements, Kushiro College had accepted five students from Finland and nine students from Thailand since then. This paper describes the result and evaluation for the International Exchange Program and cross-cultural understanding based on the foreign student exchange program in Kushiro College.

Key words: International exchange Agreement, Turku University of Applied Sciences, King Mongkut's Institute of Technology, Cross-cultural understanding

1. はじめに

釧路工業高等専門学校（以下「釧路高専」という。）は、2011年11月28日、フィンランドのトゥルク市にあるトゥルク応用科学大学(TUAS: Turku University of Applied Sciences)と、学生や教職員の交流を柱とした国際交流協定を締結した^[1]。この協定に基づき、2012年4月に3名の男子学生、2013年4月に2名の女子交換留学生を受け入れ、3ヶ月の短期留学生生活を過ごした。2014年は2名の学生の受け入れを予定していたが、奨学金支給の関係から受入先が東北地区高専に変更になったため、0名となった。

本校では、アジア圏からの国費留学生を本科正規課程の留学生として毎年受け入れているが、欧州、フィンランドからの短期交換留学生を専攻科に受け入れるのは本校にとって初めての経験であった。一方、フィンランドへの交換留学生の派遣は2011年から開始し、本年は4名の学生を派遣、これまで順調に派遣学生数が伸びている。

また、釧路高専は2013年8月28日、2校目の協定校としてタイのバンコク市にあるキングモンクット工科大学ラカバン校 (KMITL: King Mongkut's Institute of

Technology Ladkrabang)と、学生交流に関する国際交流協定を締結した^[2]。

キングモンクット工科大学とは国立高等専門学校機構（以下「高専機構」という。）が2011年1月10日、包括的学術交流協定を締結している。

釧路高専は、この包括協定に基づき、2012年10月からキングモンクット工科大学と学生や教職員の相互交流の可能性について協議を行い、交流の詳細についての調整を開始し、交流締結に至った。この交流協定に基づき、2013年5月に4名の男子学生、2014年には5名



写真1 2014年タイKMITLからの受入留学生

の男子学生が1ヵ月の短期留学でタイから来釧した。（写真1参照）特に、2013年5月はフィンランドからの短期留学生2名、タイからの短期留学生4名で、合計6名の海外短期留学生が釧路高専に滞在し、国費留学生を含めてこれまでにない国際色豊かなキャンパスとなつた。

キングモンクット工科大学への本校からの交換学生は2013年に専攻科生1名、2014年に本科5年生1名の派遣の実績にとどまっている。受入数に対して希望学生が少ないため、事前研修を兼ねた「短期研修プログラム」を企画している。

また、これらの国際交流事業の相乗効果として、国際シンポジウムなどのその他の海外学生派遣学生数が増加している傾向がみられるようになった。

本稿では、2011年から本格的に始まった釧路高専の国際交流事業・プログラムを紹介するとともに、派遣・受入学生達が外国語コミュニケーションの壁や文化の違いをどのように乗り越えてきたか、異文化理解について報告するものである。

2. 釧路高専の国際交流プログラム

2. 1 留学生派遣プログラム

（1）プログラムの目的

本プログラムは、グローバル化に対応した実践的な技術者育成を目指し、将来グローバルに活躍する意欲のある学生を、実践的な技術者教育がよく進んでいるフィンランドのトゥルク応用科学大学(TUAS)およびタイのキングモンクット工科大学ラカバン校(KMITL)に派遣し、教育ニーズの多様化に対応したフィンランドおよび産業経済発展著しいタイにおいて、歴史ある文化を体験させるとともに、両国において実践的な高等教育を体験させることにより、広い視野を持ち、国際性豊かな技術者を育成することを目的としている。本校では2011年、フィンランドのトゥルク応用科学大学との協定締結に続き、アジア圏での新たな交流協定校として2013年、タイ・キングモンクット工科大学ラカバン校と交流協定を締結し、相互の学生交流を開始している。両大学は工学系総合大学で情報・通信技術分野に強く、多くの日本の大学とも交流が盛んである。特に、タイは歴史的にも日本との関係が強く、また近年では日本企業の進出も多く飛躍的な経済成長を遂げている。このような環境、背景の中で、本プログラムでは、学生を派遣し、教員指導のもと、実験や研究プロジェクトに参加し、研究活動を展開することで、より深い洞察力、理解力や調整力を養い、将来、グローバルに活躍できる意欲と能力のある学生の育成を行う。

また、現地学生、教職員、学外関係者等との交流を図り、より深い異文化理解力、英語によるコミュニケーション力を養い、将来の国際性豊かな実践的技術者を育成することも同時に目指している。

（2）プログラムの内容

本プログラムの派遣学生は、派遣先大学において希望する研究テーマの指導教員の研究室で、英語による研究指導を受け、研究テーマをまとめる他、関連する授業を聴講する。研究室には修士課程、博士課程の学生が在籍しており、学生同士の交流が可能である。フィンランド・TUASにおいては9月からの新学年が始まるセメスターの3ヵ月間派遣する。タイ・KMITLへの派遣は本科生が参加しやすいように夏休み期間中の30日間の短期派遣としている。両大学での研究生活は濃密で、研究室のプロジェクトや高度な研究を行っている修士・博士課程の学生から受ける継続的研究への意欲・刺激は大きなものがある。

これらが留学生にとって、今後の進路選択・検討において、海外における就業、更なる研究継続のための大学院進学や長期留学などを目指す有力な触発・動機付けとなる。

（3）目標の達成レベル

フィンランド・TUASへの派遣は専攻科生を対象とし、タイ・KMITLへの派遣は本科5年生および専攻科生を対象としている。したがって、派遣学生の学年および派遣先大学の特性を勘案し、本プログラム参加学生の達成目標を以下のように設定している。

- 1) 派遣学生は、英語をコミュニケーション手段として、派遣先大学での研究プロジェクトや実践的な技術課題解決などの活動を展開することで、活動成果や研究成果を英語でまとめ、説明ができる英語コミュニケーション力を養う。また、帰国後に学内で成果報告を行う。
- 2) 派遣学生は、派遣先大学での現地学生・教職員、学外関係者等との交流を図り、SNS等を活用したコミュニティを形成し、本プログラムの継続・発展に寄与する。

2. 2 留学生受入プログラム

（1）プログラムの目的

本校では2011年にフィンランドの古都トゥルク市にあるトゥルク応用科学大学と学生や教職員を柱とした国際交流覚書を締結し、学生交流を行っている。また、アジア圏での学生交流拠点を目指し、2013年にタイ、

バンコクにあるキングモンクット工科大学ラカバン校と学生交流を中心とした交流覚書を締結し、学生交流を開始している。両大学は共通して実戦的な大学教育、地域連携による産学協同事業がよく進んでいる大学である。

本プログラムは、この両大学から学生を釧路高専に受け入れ、指導教員のもと、実験や研究プロジェクトに参加し、研究室での活動を展開し、釧路高専学生、教職員、学外関係者等との交流を図り、受入学生の育成はもちろんのこと、受入側はこれらの活動をとおし、学生・教職員は積極的に受入留学生と接することで、学生交流への理解、学生の留学への触発・動機付けを目指すとともに、更なる国際交流事業の推進を目指すことを目的としている。

フィンランドおよびタイでは、日系企業への就職、あるいは日本でエンジニアとして働くことに憧憬する工学系の学生が多い。このため、受入学生が配属研究室で指導教員のもと、日本での研究活動を展開することで、継続的な研究への意欲と、日本の大学院への進学を含めた進路選択・検討の触発・動機付けの内容となっている。このためには、留学生の滞在期間中に北海道大学を訪問するプログラムを北海道大学国際本部と連携し、企画している。また、本校は日本製紙釧路工場と連携して、留学生が本校での留学期間中に日本製紙釧路工場を訪問し、工場施設を見学するとともに製紙工場エンジニアとも懇談を持つ機会を設定している。日本製紙はフィンランド、タイの製紙会社との合弁事業を展開するなど、積極的な海外展開を行っており、留学生にも大変興味を持っている。

このように、本プログラムは日本の大学院進学、日本企業への進路選択・検討に対する触発・動機付けする内容となっている。実例として、24年度に本プログラムで本校に留学したTUASの男子学生1名が、26年度に東北大大学院に長期留学中である。

(2) プログラムの内容

派遣元であるTUAS、KMITLが派遣学生を選抜した後、本校に対して選抜された学生の専攻分野、成績書、留学志望理由書、履歴書が本校に送付される。本校はこれらの資料を基に、受入学生の専攻に応じた研究室の指導教員を指定し、研究室と専攻の配属を決定する。受入学生が本校に到着後、研究室の指導教員は受入学生と面談し、学生の専攻と興味を考慮し、研究、調査または実験テーマを決定する。また、専攻科長と受入学生の研究指導教員と連携して、学生の専攻分野を考慮しながら、学生の興味に合わせて、学生は本校の授

業科目を選択して履修を行うことができる。更に、国際交流室長が教員の協力を得て、学生の専門分野に合わせて特別授業を複数設けている。

(3) プログラムの達成目標

フィンランドおよびタイの両大学からの学生受入をとおし、本プログラムの達成目標を以下のように設定している。

- 1) TUAS、KMITLから学生を受け入れ、指導教員のもと、実験や研究プロジェクトに参加し、研究室での活動を展開することで、より深い洞察力、理解力や調整力を養い、将来、グローバルに活躍できる意欲と能力のある留学生を育成する。
- 2) TUAS、KMITLから学生を受け入れ、釧路高専学生、教職員、学外関係者等との交流を図り、より深い異文化理解力、英語によるコミュニケーション力を養い、将来、国際性豊かな実践的技術者を目指す留学生を育成する。
- 3) 受入側は上記の活動をとおし、学生・教職員は積極的に受入留学生と接することで学生交流への理解、本校学生の留学への触発・動機付けを目指すとともに、更なる国際交流事業の推進を目指す。

2. 3 派遣・受入プログラムの意義

国際化が進み、教育も経済も発展している海外の大学に学生を派遣し、国際的な環境で様々な国からの留学生と交流する機会を提供することにより、広い視野を持った実践的な技術者教育の実現を図ることが可能であると考える。

さらに、釧路高専に海外の大学から学生を受け入れることにより、多くの学生や教職員が留学生と交流を図る機会が増えることで、同様に釧路高専学内においても広い視野を持った実践的な技術者教育の発展に結び付けることが可能と考える。

このように、トゥルク応用科学大学およびキングモンクット工科大学との交流協定締結は、釧路高専にとって教育目標の一つである「広い視野を持ち、想像力豊かな技術者を育てる」という理念に合致するもので、プログラムの意義は高いと考える。

2. 4 その他の海外派遣プログラム

その他の協定に基づかない以下に示す海外学生派遣プログラムがあり、派遣実績を伸ばしている。

- (1) 海外インターンシップ（高専機構主催）
- (2) ニュージーランド語学研修
- (3) 国際シンポジウムISTS

(4) タイ研修旅行(2013年のみ実施)

3. 派遣・受入成果と評価

3. 1 派遣プログラム

(1) 派遣学生の成果概要

本プログラム参加学生に対して、語学の能力、留学に対する期待や不安、初めての外国での生活や交流に対する期待や不安等について確認した結果、すべての項目において派遣前と派遣後とでは大きく意識が変化しており、良い方向に進んでいることを確認している。

また、これらの意識の変化の把握は、滞在先での研究の進展、生活面等についての記録として学生に提出を課している週報(Weekly Report)でも読み取ることができ、滞在1週目では英語によるコミュニケーションの困難さにくじけそうになっているものの、後半ではすっかり英語でのコミュニケーションに自信を持っている様子が分かる。派遣前／派遣後の意識の変化を派遣後にまとめて把握する「成果報告会」だけでなく、時間の経過とともに学生の意識がどのように変化していくかを把握するための効果測定には「週報」が効果的である。

派遣学生の意識の変化は、これらの週報や帰国後の成果報告会において把握し、効果の測定は派遣前・派遣後のTOEIC受験を義務付けることで実施している。

3. 2 受入プログラム

(1) 受入学生の成果概要

これまで、本校で受け入れた留学生は、日本文化、日本語に強い関心を持っており、受入後は日本語の語学力向上が見られるばかりではなく、同時に滞在中の共通語としての英語の会話能力も向上していることが把握できる。また、留学生は日本の文化や習慣に対して、より理解が向上していることを週報により明確に確認できている。留学生の留学最終報告書によると、半数以上の留学生は、就職または長期留学で日本を再訪問したいと報告している。受入学生の留学参加前と参加後では、留学に対する意識変化が見られ、語学力も向上していることを把握している。このような変化は留学生だけではなく、留学生と交流を行う本校学生にも見られている。

また、留学生を受入れることにより、留学生だけが恩恵を得るだけではなく、受入れ側の学校教育活動の国際化の発展にも寄与できる効果が確認されている。このような成果を自己点検により確認するため、本プログラムは留学生だけではなく日本人学生に対しても、語学力の変化、留学や就職に対する意識の変化、異国

の文化に対する理解と興味の変化、情報提供の適切さ、留学に対する満足度（留学生のみ）、宿舎生活の満足度（留学生のみ）、日常生活の満足度、交流の積極的な参加の項目に関するアンケートを中心に調査を行っている。

(2) 次年度以降の計画

平成27年度以降も確実な派遣／受入を行っていく予定であり、フィンランド・TUASおよびタイ・KMITLとの信頼関係の醸成に努める。また、新たな試みとして、タイ・KMITLとの交流協定の範囲で、KMITLへの短期派遣に併せて、次年度以降での留学希望学生の確保や海外留学への触発・動機付けを主な目的に、1週間のショートビザによるKMITL訪問（現地5日間、キャンパスツアー、研究室ツアー、授業聴講、タイ文化体験等）プログラムを企画し、KMITL国際部との調整を行っている。相互交流の観点から、タイ・KMITL側からも同様な主旨で、本校へのショートビザ受入依頼があれば積極的に調整を行う予定である。

3. 3 派遣・受入実績

本格的な国際交流事業がスタートした2011年からこれまでの海外派遣・受入学生数を年度別に表1および図1に示す。また、図2に、その他の海外派遣学生数の年度別内訳を示す。フィンランド、タイの派遣・受入学生数は各5名としており、フィンランドについては、派遣は順調に伸びているが、受入は本年度ゼロ名となってしまった。TUASでは日本留学は大都市にアクセスが良い東北地区を希望する学生が多いようである。この点、北海道の魅力が発信できるようなネットワーク作りが必要である。タイ・KMITLでは北海道の人気は高いようで、枠いっぱいの留学生を受け入れている。釧路高専からのタイ派遣については、これまで毎年1名の応募しかない状態である。学生の目が東南アジアを向いていない可能性もあり、低学年から興味を持たせるための低学年向け短期研修プログラムを企画している。

表1 フィンランド、タイの年度別海外派遣・受入学生総数

国 年	フィンランド(TUAS)		タイ (KMITL)	
	受入	派遣	受入	派遣
2011年	0	3 (0)	—	—
2012年	3 (0)	3 (0)	—	—
2013年	2 (2)	2 (2)	4 (0)	1 (0)
2014年	0	4 (1)	5 (0)	1 (1)

(注) : カッコ内数字は女子学生数を示す

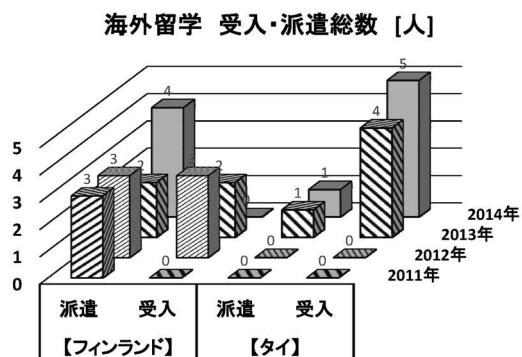


图1 フィンランド、タイの年度別海外派遣・受入学生総数

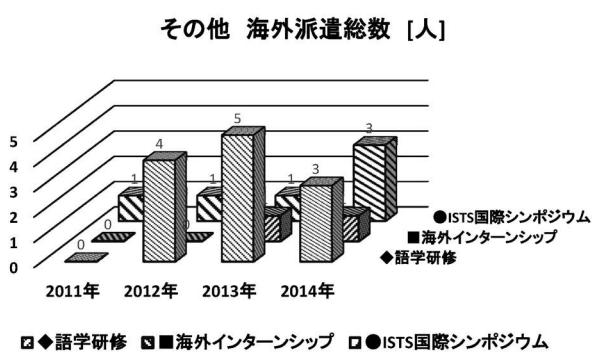


图2 その他海外派遣学生数の年度別内訳

4. 異文化理解について

4. 1 異文化理解とは

「異文化」の定義に対して対極にある定義は「自文化」と言つていいだろう。自文化は即ち「日本文化」であり、その日本文化を構成する要素は、衣食住、日本語、宗教、社会関係、人間関係、組織、儀礼、価値観、死生観など様々である。

日本文化は日本独特のユニークな文化であると一般的には考えがちであるが、昔からの文化の純粋培養では決してなく、異文化との接触を繰り返しながら培われた歴史的な文化の混成性を持っている^[3]。日本人の歴史的な異文化体験は「明治維新」であろう。この時の異文化への憧れが物事を発展させる重要な動機、原動力、好奇心であった。即ち、日本近代化への原動力となった。しかし、異文化への憧れ、理想化と共に理解できない異文化への拒絶、侮蔑も同時に同居していることが多い。これが異文化理解への複雑性となっている。これらの感情は日本人だけでなく、世界共通である。「異質」なものとしての偏見・排斥は、たとえば日本が受けた例を挙げると、1980年代にあったヨーロッパ、アメリカからの「日本異質論」であり、ジャパンバッシングとなって現れた。これは、日本の経済

的台頭、「JAPAN AS NO. 1」と言ってはばかりない日本人のおごりにも起因している。

「異質」というとらえ方には侮蔑的な感情がそこにあり、異文化に対して無理解であり、無知からくる偏見は大きな国難や摩擦を生む結果となる。特に東西冷戦終結後の世界を俯瞰した時、民族間協力国家であつた国が、政治・経済問題から民族浄化を叫び、異文化を排斥し始めており、「文化の違い」が政治的意味を持つようになった^[3]。

では、異文化を理解するとは何か。本年度からフィンランド、タイに派遣する学生の事前研修の一項目として、この「異文化理解」について取り入れている。この事前研修の中で、異文化を理解するということは、「体験により、文化のあり方の多様性を認めること」であると学生に説明している。筆者は、高専機構が主催する「海外インターンシップ事前研修」の中で、講師として「異文化理解」と「サバイバルイングリッシュ」の講義を行っており、「異文化理解」については同じ説明と具体的な注意事項を与えている。

4. 2 派遣・受入学生の異文化理解

(1) 派遣学生の異文化理解

フィンランド、タイへの短期留学派遣学生は、もともとフィンランド、タイからの留学生との交流があり、文化の多様性を認めるという異文化理解の基礎がすでに出来上がっている。また、事前の学習も充実しており、留学への期待感、異文化への憧れが大部分を占めているものと思われる。したがって、これまでの短期留学中の派遣学生のレポートから、異質なものが許容できないという内容の報告は一例も見ない。

これと比較できる事例として、海外インターンシップ派遣、ニュージーランド語学研修、本科4年タイ研修旅行（電子工学科、2013年実施）がある。海外インターンシップと語学研修は選考過程を経て選抜されているため、モチベーションも高く、特に語学研修はニュージーランド現地ホームステイという濃厚な接触があり、ルールを守り、摩擦を避ける技術も身に附いている。

2013年に初めて実施されたタイ研修旅行（電子工学科4年）はクラス44名、5日間の団体行動であり、行動の制約は大きいものの、異文化理解や英語学習意欲の向上につながる一定の成果を上げている。しかしながら、アンケートから約2割に相当する学生が異文化に対する拒絶反応や異質感（タイ料理臭、トイレやシャワーなどの生活環境、タイ人の英語、日本が一番という思想、など）を持ったことがわかる。事前の調査・勉強不足やタイに対する興味の欠如などの要因が考えられ

異文化理解などの研修旅行の成果 [人]

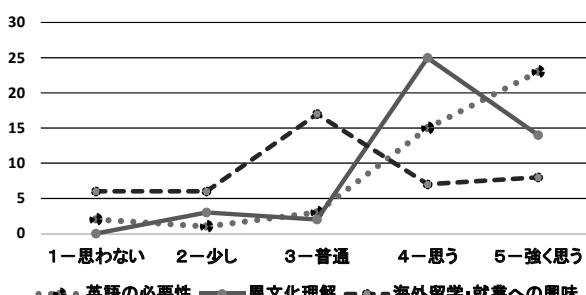


図3 タイ研修旅行の主な成果

るが、図3に示す研修成果アンケートから、英語の必要性を感じながらも海外留学や海外就業への興味は薄く、「日本が良い」とする内向な発信が多く、まさしく現代の若者の実態を表している。

(2) 受入学生の異文化理解

表2にフィンランドからの受入学生の異文化理解について、彼らの最終レポートから主な感想をまとめた。

フィンランドからの第1回受入学生3名は、日本語の理解力が驚くほど高く、1名の学生は3か月の滞在で日本語を自由に話せるまでに上達した。これは留学前から周到な準備をしていたため、日本の食住文化にも異質感を持った様子はない。なお、3名のうち、1名の学生は、本年4月から日本への2度目の留学（東北大学大学院）を果たしている。

第2回受入学生2名は、第1回学生とは対極的に全く日本語は理解せず、日本文化についての事前調査・学習も充分ではなかったようである。

留学前の志望理由からは、日本文化への興味・憧れが見て取れる。しかし、留学後は、来釧当初、初めての海外渡航での環境変化（食事、習慣、言語など）から来る不安感や釧路高専生の英語スキル不足から来るコミュニケーションの問題に直面し、フラストレーションを溜めていた様子が伺える。受入側から見た場合、話しかけても二人の反応が全く無く、コミュニケーションを取ろうとした学生や教員にも違和感を覚えるものが多いのも現実であった。また、1名の留学生は日本の食べ物、習慣、すべてに対して「Weird」（不気味、不思議）という表現を多用するため、距離を置く学生も出始めた^[2]。

その後は徐々に打ち解け、最後は表2に示すように、「あるがままに受け止めればよい」という心境にたどり着いている。留学生達にとっても、釧路高専での異文化体験や初めての研修テーマでの呻吟など、自分を

表2 フィンランド留学生最終成果報告会の感想

2012年 フィンランド留学生受入(第1回)	
A	● 高専の学生が授業外で学習（残業）することに驚いた。残業は社会人だけだと思っていた。もう一度日本に留学したい。
B	● 日本人は予想以上にフレンドリー。学生生活はとても平和で、すぐ馴染めた。
C	● 日本人は大変礼儀正しい。学生はシャイでなかなか会話が始まらない。
2013年 フィンランド留学生受入(第2回)	
D	■ 初めての海外、自信がなかったが、たくさんよい思い出や友達ができた。 ■ 日本のものは全てが小さく、奇妙なものばかり。
E	■ 滞在の最後で、日本の不思議なものや習慣は、自分にとっては単に新たなものであって、あるがままに受け止めればよいということに思い至った。

見つめ直す機会でもあったようで、2名が人間的にも成長した様子が伺える。

5. おわりに

釧路高専が本格的な国際交流事業・プログラムを推進するようになって4年目を迎えて、手探りで行ってきた交流活動を振り返り、交換留学生の成長はもちろんであるが、受け入れ側である釧路高専の学生や教職員の意識変化は大きいものと考える。今後も継続してフィンランド、タイとの交流を深め、信頼関係の醸成に努めることで更なる交流の拡大を目指し、グローバル人材育成に貢献したい。

参考資料

- [1] 小松正明、神谷昭基：「フィンランド・トゥルク応用科学大学交換留学生の第1回受入成果について」、釧路工業高等専門学校紀要第46号、2012年12月
- [2] 小松正明、神谷昭基：「トゥルク応用科学大学およびキンゴモンクット工科大学からの交換留学生の受入成果について」、釧路工業高等専門学校紀要第47号、2013年12月
- [3] 青木保：「異文化理解」、岩波新書(新赤版)740、2001年